



## 2016年 生物工学功労賞 受賞

### 受賞にあたって

サントリースピリッツ (株) 商品開発研究部  
スペシャリスト 坂口 正明



この度は第10回生物工学功労賞を受賞させていただき、身に余る光栄に存じております。功労賞にご推薦、ご支援いただきました五味会長をはじめ学会、産業界、大学の関係する皆様に深く感謝しております。

1980年サントリー(株)に入社し、酒類研究所に配属されました。入社後12年間は、ウイスキーやスピリッツの技術開発、その後6年は、生産現場でのグリーンウイスキー、アルコール、焼酎などの製造管理・開発、それ以降は、連続式蒸留酒の技術開発、アルコールの品質保証などに関わって参りました。

学会との関係は、2001年～2009年に関西支部委員として企画担当や副支部長、2009年～2013年に理事、2013年～現在は監事を拝命し、日本生物工学会の活動を務めて参りました。本学会に関係した主な活動について振り返ってみたいと思います。

**1. 産学連携活動の推進** 飯島会長の時代(2009～2011年)日本生物工学会の重点方針の中に「学から産へ」という目標が示され、産学連携活動を重点課題として意識するようになりました。2010年の宮崎大会では、本部企画として「醸造」「培養・計測」「産学連携」の3テーマでシンポジウムを実施し、また展示業者との交流会を行いました。企業にも役立つ学会活動を基本方針として打ち出し、「産」活性化の機運が高まってきました。

2011年～2013年産学連携委員会の委員長に柳副会長、幹事長に坂口が就任し、原島会長、理事各位との自由討論を重ね、産学連携活動の課題について議論を行いました。(1)学会における産学連携活動とは、(2)産・学のニーズをどのように反映するか、(3)産・学の出会いの場を育成するには、(4)教育での産学連携は可能か、(5)産官若手が学会活動へ参加するには、などの問題意識を具現化するために、産学連携活動の基本骨格とその達成のための新規提案と推進を行いました。その具体的な内容は、

- ・本部企画シンポジウム(醸造、培養・計測、産学連携)の継続
  - ・【新規】産学技術研究会(産のプロフェッショナルからの講演)2回/年の定例化
  - ・【新規】生物工学基礎教育セミナー(学のプロフェッショナルからの講義)1回/年
  - ・【新規】産業界からの非常勤講師派遣の斡旋
- などにより産学連携活動、日本生物工学会活動の活性化への提案・推進をいたしました。

2012年7月に実施いたしました第1回産学技術研究会(会場:サントリー研修所)に参加した学生より原稿用

紙2枚の手紙を頂きました。「産業界からの発表を聴いて、今まで学業や就活で落ち込んでいましたが、自分なりの軸を固めることができ、背中を押して下さった」などと書かれており、その後希望する食品分野への就職もできたとのことでした。産学連携などの学会活動の真の目標は、知識を受けることはほんの一部に過ぎず、人づくり(人間力形成)であることを強く感じました。

**2. 生物工学懇話会、特別講演の活性化** 生物工学懇話会や日本生物工学会大会の特別講演において、幅広い内容での産業界からの演者・テーマを推薦いたしました。「ホンダのDNA:挑戦・創造・革新」(元ホンダ技研・小林三郎先生)、「脳とイノベーション」(脳科学・茂木健一郎先生)、「気づく力がヒット商品を生む」(商品コンセプト研究・小山由朗先生)、「「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復宇宙旅行、その7年の歩み」(JAXA・川口淳一郎先生)など現場の迫力が伝わる、人の心に訴える演者とテーマを募りました。産業界のプロフェッショナルによる実践的な講演はたいへん面白くわかりやすい、学会の雰囲気が変わってきているなどの声を頂きました。

**3. 学会行事へのサポート** 企業の学会への貢献については、各社の文化の違いによってさまざまであると考えております。日本生物工学会は、賛助会員106社の協力が日本生物工学会財政の大きなウエイトを占めており、産業界からの協力がなかったら長期的な学会活動が成り立ちません。このような状況の中、学会活動の会場や飲料などの提供において支援をさせていただきました。

**4. JABEE活動の推進** 生物工学会派遣のJABEE委員として、大学教育の中に産業界の感覚が少しでも伝わればとの思いで、審査員を担当させていただき、大学の抱えている「あるべき姿」について産業界の立場から率直な提案をさせていただきました。

以上、主な本学会での活動を振り返りましたが、これら活動の推進において、学会会員、学会役員・事務局、産業界、大学の皆様から絶大なご支援を賜り、感謝しております。会員の著名な先生から「これからも日本生物工学会への今以上の貢献をお願いいたします」と激励のメッセージを頂き、まだまだ現役の身でもあり微力ながら今後の学会発展のために協力を継続していきたいと思っております。また、学会活動を通じて広範囲な産学の専門家や学生と交流できることを今後も楽しみにしております。

最後になりますが、過分な賞を頂き心より感謝申し上げます。